通言總解

京傳作

13
ヘ陸13
ソ15ノ

特
門へ 13
帙 115
巻

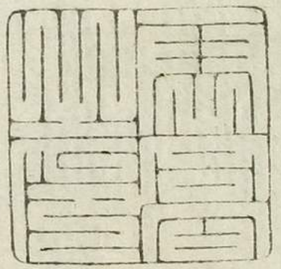
通言總籬叙

尾國住人、玄哉味と。鋸木屑をめく雨非
ずして後ぞ。粤小京傳書樓乃通云を
強者不呑ん〻頓て果表紙の一冊を。
見後楊が仙術ふあれば放下師の小刀ふあれ。
閲之象牙撥申ふ說を聽之言文面ふとゞ。

潮ゝ出て牛墓に唱道す。中街ゝ駅家
の下路乃音耳乃もつの。貫ゝも羅
しつゝ。朝顔乃泣腸ゝ清楊ゝ時起れ
疲積を掃ゝ。こゝ十七明れ長を慷慨
てハ安れ蔦城魅ぞ。遠夜乃鐘を聴
ゆて、穣久紀を嘉見ゝれ笑顔

晩ゝ紅泣白も。客塵ゝ衣領ゝ入る風
客ゝ。鼓子花乃関扉も壺盧れ色白
なるも繽紛咲總羅ハ箸去郭ゝ通
て魅も花實相郭を平腸を飾
我かの羅紅下ゝ居三徑荒を斬て。番
牡の美を知るゝ至ぶゝいへども。二と

三弦緒を肇。持人今と苦千京傳
を糸を弦一曲を唱ふ。糸巻を チト
ふ弾ひらかしこ爾
久キ而ふ自出



自序

我嘗以為肝書稿と
宗屠の病と失如
ふ。持ふが病腹痛み脳
金屎をんが為風を源つ
立て此嚊を通ふと蛭

故也蒙宮宮花屋を喰む蟲
黄象乃嫌銀とゐるん。ナ
倒の長屋退屋の
餘宮氏妻似ざ
かゝ屋の屋
のぞるまゝ
ゑぐ。世間

其屋の蟲
宮とゐふとも世間を驚ず
の蟲不安
屋が悩ん。吟
ものゝ。干時
事下未参陳

山東屋のひとまもをこ

京ばしゝの傳述

通言總籬凡例

○此書ハ論語ニ所謂損者三友ヲ以テ大意トス蓋總籬ト題セルハ流行ニ後タル古句ノ雜无ヲ以テ也

○艶治郎ハ青樓ノ通句也。早去々春江戸生艶氣梳燒ト云冊子ヲ著シテヨリ已恍惚ナル容ヲ指テ云爾。因テ以テ此書ニ假テ名トス。氣之介志菴共ニ彼

冊子ニ出ル所ノ名也

○妹妓及雛妓ノ言其儘ヲ記カ故ニ詑ヲ不改假名違ヲ正サル其音ノ訛ヲ知シメンガ為ナリ

樓上奇談　吉原楊枝　京傳作　全一冊　来春出版

金の魚虎をけらんで。水道のあと。産湯浴て。御膳ゑてすれ出てハ。お揚の糸と食て。乳母日傘ひく長壁の細摺くんじきに隆茶も皐と言ふ田の警策おつて安房上総も近し陽水の銘を中嶋と唱ゑ町の角屋敷とあげて大〇と打ハ。のれ花すぐありける。江戸子の根性骨。第ゑ見渡る日かぞの表

中から。ぬりさし付られ、新風や伊勢町の新みなき美人
に命あらぬ、前栽の三ちらひもふいつでも黒格子なるん
のうち棲の出してある、かせ芝蘭の香と丘都の梅も江戸
がこの。北江青楼に居ず鮑魚あるいは竹てる門に。
ごでてこれの外子。院宗ちのひとりむすめて

しまんだよ 黄のやうな八丈はけんがらくわざこの小紋とおつてた黒ごいはいま悔やんどうの
下着でんちりめんのらせん志ばりの雪でんで下着へこな黒なかこのうち色りでれ
おりとこちらりせんのもよう出し。腑ぐらの白羽二重でおそくひろさ仕立ちのもそ
おりとろの吉兆八丈下りなかさ仕立五丁ひりく、わやするとうらで黒のひ
うらのちろんひけ帯わおまんて茶どんものかりよう様にさんをおりまさにして。
此の町ぞうやと。八ッとぞろのろびさしもさざのてさざうくてうのかんかです

小町のおやじぢちいてひれい。目やのさうさき　おしやつさき来ものつかえ　そんでうくえ出りのれいていしや
ワ井おまん　えちりめんの小袖おうえと来なくこのそありがたさびますそるのさささわてらうあり。おさらぎのけわざにちるでまもられてむけ
表のぼうおや自ぢんさんがさきしつてよ　とうちへそりこれがおぐりそおに女ぶりうの
さしつとうけるがし。おとちやのそけて布子にほんぶのつやふうきされてえん
ぶりそうけさやうとさかし。小女しも　合ずてうれなまかてどてきつらのふかし
のえでく。ちんまゆと　あびせらいる
小女　こうしているりんでよちつとしていやアレ
ごろじぶろし。いろそうれしがりませ
女房おちせ　はやなしえ　ご。あがうど
みてふそで。ぶるなくてのはうでのひろいそんでありてびちやろうそての若やさきさ
のりくへまけしいまづれのかうりやらさのふちやしさをたびへえさえ。
そこへらあざむきそびつおそぶろとおとうてあるそぞれはなんなおそくろうそふ
けやうらかしたてく。まずだれ今とらおや子のつなくあげ女房りとれ

松だやのさるれいんのせましんそろあ（り）しかわんあけのちらまてえいいろさやはく。あとかが女かりにおりしやうこの毛のうきとふわとぷくの
うきこのまくらだてはくおうそうれむてまでし里のそ寛がや。まずそのまんま二三日ほう
へはれていてくはさやあ。ヲヤ志庵さんのへおいでなさ
んした様。きさん（へ）。ひるいおまちでござりやしこ。
うらでござりやすそれは仕かけさし□もとどうさとう
〔三ん〕さてのうちの
あげい松たやの湯どのといふすんぶの〔志あん〕なか町の橋
志ごくもわりやすて　あちらへ仲ぢさろりのはしらにあらあつていろく。さそせんを出のびでまでいいくいる。そり八つむござ
〔あらな〕しかのそでにのちくきてぞうきそのふそでがりへござおさこのぼだかと前にしていろく味せんを下女のしかたもことざきんか
〔表ゝ女〕これおまちなさい
いなもうくさかてちく〔三ん〕てへ婉ねむそふまろ
〔志あん〕をさんとにけたんそうというなしぜ。丁子屋
ぞて塩湯でてでしうれさとふまるで〔表の〕ゆふ屋へ
うまさの茶だんで。拝屋かへ今まですぎけさへつに
けへ今中で今を出申た〔三ん〕はまさんへおめ。深川
のせらひかの〔志あん〕おみをもうすぎうさせつぎよ。このごろや
どこの当番ひよかくへと仕く。りしつくてそうぞ深川までぞくとしてうら
公表ぶでしんぞうと出された。〔表の〕さ
ひとしへさとしてうり
ムるもれ俳く尾ぞあや

山東りいこう画

のおよう。五枚。[illegible]。中二ぢんまで。仲ちあぞくふ。
うぞうむぞうとしつれく。むそうぐわぞうぞうやさ 左ぢん
ときあうさんやぶんきあうさんとちぐくまそうう
とんとぐぐら福の。そひうひとう戦たまうきうひうんぐ
そうぐのトいぐうぐうう。ちう川屋が仕立のあんぐらのぶぬひ。
外る女房ハせんくのかぐちにかうそいるひうぬやうちんのちやとつぐで
友人へ出もとう長の秋なりうう。たうあ宗旨がかいさきくのそんぐ
だぐうう。立のえいうく
うんひうう。をいぐ
左ぢん ぞうんさんが酒をのまうあ。わくへ。ぶ。ぶさぐぐ

よ 左の めいすう今の通八下ぐさいうれ。ぞうう。ぞうんさん
ぶあのいくものがあう。さのふ。中侍屋のこそんぐぶう
隅田川まうくさ。おちうんとさせあ。志かさうか
ぐ何も。あれ〳〵と 左ぢん かんぐんあひのうぐ中ぞいなおしう。
あのあぐのへあんぐ 左ぢん あうくびひとうあうぐ 左ぢん ちい
しいりのでハあり。さ。けさのふつけぐこぐうあうハ 左ぢん
むぐうくこそくく。ちうあのぐんぐ。
ぞのうさあけ
松ぞふ屋のあるぐこひつ。ぐ。けうくうう。ぞうひ

やらざ【花の】おまさがひいきにやしたら【喜見】うかぎると
とられやりハ【ゑん】どうだろうくいふすりふいらうる
のトあさんゆうるゑのまんさげく。なんまゆをと一所うくらいでも【花の】書ら白ら【志たん】やつぱる
もちらとぞもがやぎのるさあそ。白。ぎらど。うるみさらひのつくらく安がらい小女ま
いつけくほうくへてらへとうにゆる【おちや】つめくよ【花の】とききれゑんさん京町
の彩進げへのきるのもつんだにあつてぎ弱のぞざうや
せんう【ゑん】それぐふさいるのさ二くひのうちれぞ
のまらうひ女気がわるからよト作よりやがらつさ書らさんとやきざるのぬのあざうぐんのぺぺ

のきせるくむりをとたらうくみ々をる【志わん】ぜんたく万ぎれしよきをつけく。
とアー額ドにさてるかくきわ令るトちゆうきてやれられしがくきる
【ゑん】はさそおけうやの開が殺をおくきさがけいせいも
内せうくたくりよあつくりゆくいるそくよ。行う
わされずくきぶえ入のうろうくよまらくいふ。ふく
だつけトふくさつの表ニの引うけのきへ入くらし。やけぐの君づをするゆうにそくのへだべぶちらの手切入かさ。殺をほうら出さ。
表の伏れくうくひらさ。とうてとせく取りくさきをとんぐくる。行らくずてんくうをまいくよおん中の丁での所ひ引ききをつけるだろうにてきるも
たてりずくろ。江戸中のうさをつけて。いつそそれくきてくれるとさぶんてひ。茶子ぞひぐらうのかまゆかよがなかべてある。ぞろへぜんとのきれ

合く。ゑんそうをばうやまひけくよぶきあうげんじでうちあるまくと。
さらうそくられべきのよりけハふうらの女房とおりひまんてしまひ
〔上中の〕出家のもとへぜん何かあまかて今様おの母かふたし
くれ人ならればこく重ねさると。桃幸すてく〔ゑん〕や
あとてびうあ何ぺげれくか出あさるこても二ろひをされゑん
あうよあさるとめしてぺをねぞるのひのをみるよふよ。
あお方へ今でらせくいふかつどうそをあつかれへぺふあう
てみればふびんだよきろひとをきろえけもあめ入かぺに
戸所のかさを剣くいつそよりくむぞくぞろくや

らくかくらばつなよ〔上中の〕そよあされだぺきろひでくさ〔上ゑん〕
重ねられくむじゃひ形。でいろおとこにハ何かありトそばにある三味せんを
とうくつめのささそでお
おりやまてなきむく
〽あ年月も流れれさぬ浮世
のさまれ夜毎でをよふり袖のくはにてまちきのちと
はふびぞ花をそれらきあのでおひとくきあくのゆる
せあく。〔おちせ〕そのめりゆきでよびをろひろあのおつく
まてばほとやらかへぞのあとかどうづく〔上ゑん〕墓林
がくろゆしにあしとうけさよ〽みのさきめのにべによ

はんうちぬんとゝ。ぞうぞくそんぞこゝもゝ。ぞうてせう
ちでたうけれど。ゑうはれてゝゆゝとうみゝゝとうゐ
ゐうきゝはそうれぬうとゝれぬ分ふれゐひぐゝ
ゐせんぬぐゝぞうゝゐぐゝゐけんにゝとうて
ゝぐんせけゝぐんてゝのゝと分ゝいうきて。ぞうひ
のなゝゝ夜のぬゝ　【夫の】京伝ぐうゝぞうぐうゝ
ゐるゝぐ　【そうん】うゐやのゐぬぐゝいぞんのゐりゐゝて
ゐとういうゝうけの　【夫】それゐうゝ夜ゝ　【おうて】

夜ぐりは代月の浦川はんのうひぞんぐゝそうぐゐく
【そうん】まゝの浦川ぐゝ夫の【夫の】かんのんのひりたい
ゆたうかゝうれゝゝそうぐぐゝうゆゝて　【おうて】ゐの年
さんゐゐぞり仲町はいうゝひゐのゝゐ　ゆゝて
せぐ福ゝ　【夫】そうぐゝそうゝぐぐゝゝぐうゝ。
そうおうゐ西ゝゝそうゝ出ゝく形うのぐうゝう。ゐ
ぐうゝくゝのおいゝゝぞうけゝてゝぞうゝたうけ
【おうて】ぜんてぐうゝゝゐうゝぞうゝゝ　【夫】おりゝの

おちせ　ゆふべ花のきんばしやとうやしたら今がなるにから
ちやばけしひ　志ゆん　のりしらひだらしひとぴさし
ぶりてきひとへ（トウちやん。女房へはどうしてこの家へ中にしてぴつたりとこそ見へてぴつちりとたつかへ見へて八本のつるす
のきねかわれどもの　花の母さん（けしからぬ）そくさとしぴつくりげんなあひさや
てゐるところへ（下女かなしきのところへくる。およ〳〵かゝるんぞまでる）
花の　それはあひのそのまんまだしや　おちせ　すや　それ
でも　志ゆん　いつまふく（トいふ中へ）はやねのあひ　志あん　て
ちからのまうらどきて
いろアいなうすしみちろりだのしかれきりんぶ　びんぼう
（さけ本）
ありろうねぶるもの
ほかたけてなまよ　花の　ホてニ　船のよ　御の川路らうの家入
と　おさへおさく中だでよろし中（ト戸棚から家入と
二つだしてこころひとつ）
ふさら〳〵そらの
かりかねいとさて　志ん　ころ豆京が母なうへ。新をふる方さ
だろう金一ねさとひの　ぐるちふいつぷかのぐとそぐ
ねさ神とびちら数(さいさい)青屋川山谷の俤(げいげん)ふうる涙を
の玉川と敷波と見せすまさしたびたび早別
の吉野がけむ　ぷつ千里ならびと月がでるの鐘は白
ひのふぼうさん一つの様をよぶろうげられもそくさとこい
よかろう　志ゆん　代ろ橋場ぐ江月(とうげつ)のまと一紀(いちぎやう)

とゝゆた一斤の雲白雨自ゑとゝ徐さ。
ひゆゝぶとゝのゝござりやしさ。天ばいちばりふて
じけざる。風雷一ゑをゝあんらゝゐんさ。それ
ゑゆづゝくゝれゐゝの。はるゝやゝとゝよ
りゝくゝゆたつけ。ふゝの万千ぐりゝくゝる
松花堂のほていとゝぶ出ゑのゝくゝめゝさ。まゝる
くゝゐもゝりぐゝちめゝんなゝゝさ移ゝぐ。柳郎

きんゝ村田屋ゝくゝちゐるぐゝき。ゐゝとゝらゝゑゝちゝぐ
ござりゐゝさ。山崎村田屋の部屋公屋屋公
ものぐ。まゝるゝちゝ及もゝとゝのゝとゝゐゝて
あそこゝれその示といふゑゝをゝれゝがゝつゝるゝゝ新右
ゝゝとゝゝ湯ゝゝゝゐゝちゝくゝとゝぶぐのゝちゝ
ふゝふゝゑゝちゝゝたゝつゝけ。ゐゝまゝるのゝゐゝてふ
ちんゝがたゝのゝくゝゝけ。たゝゐゝのゝけゝさゝばゝり
のゝゐゝよ。田屋ぐゝくゝるゝのゝるゝくゝてゝゐゝやゝまゝる

て[ろん]大木戸のかうさんにやさぐの今のはさんぐ
あるれいあるぐの[ろん]ばかれへばのぐそんとうけるのさ
[ろん]おいくらあの土地なれひてふ通ぐよらつたびぐ
也てみやうもそどこにいつてはかせ遠う西へつて
すぐ[ぢの]れぐだなつてもあのあさ[ちあん]まりいそさ
だもさきばりだよ吉原あるばけのみとやうつ
いよあ屋のあのあをたりあもと[ぢの]いやらい屋のあぐ
さちやりあくさうぐさぐこうるのいよ云るあのに変

いあるりのんぐりにぐるのぐやうなのんぐ
びもそうさぐみたーとうらくさよらい中をかづくりも
ありやりたき男をるびまるびまるらくぐやーたくく
ばりくうちもばりあまぐぜんくーうくと美人
のくをあるあさ[ちちを]モしまりさんれぐやでもなくれ
言ぐごうりやーたれへ[ちあん]九るびやるぐにも
よくばりくよ[ちちを]ぼくーぐさんぐユ義ぐ。ぐ屋の
山くさんぐんぐ。ぐ門のばくをあさんぐそけれ

でぶりひろすがでござり申たらけ【喜代の】祝言といふ大
宗十郎松が云ふんのおさくとされてぶる衣のとよ
くゝをとていへそこふぷおうしびやわれ今（子丑）【志ん】
あひだにが中洲でめつらのむだるとろくてとこさぶ。
柳ひそをおつて【太ちな】てん（モモ）ぶらこあつてきいよぷさん
やそそこどやんのれ今【志ん】は今まで浪人のやきぶら〳〵
そくへふつてといふふかいてぞれからゝやゝぬしの
えんどうぶそうで【志げん】さんてらいウア太さうぶさく

ろたのにまつらわつてようと付ずれ【喜の】のちつよのくぞ
りうせとそのうれいくあざ【志ん】しやれあでへ子丑
ろる【志ん】やけやとうぞいくのさ
（いつも女房のよつてゆくら　はでどうでのたつやくさ気さ）
（びんゆりゆぱにあさくにりりらのくや梅村　のたれたびひぷ志んテト志あんへ今来て付をいれ）
【志ん】あるあぶかおとゝや
うかのくらてふぞ。ねじとかいおつて【志ん】より松だや
じやたのは梅のめるいのでとだりよ【喜の】たのれへつけ
めさ。扇屋のせんだいのぷ子やのてゝたりの
ぜん。ぽの閏屋のかよとていら。竹屋のあ見

ちぐうまつ屋のこまものゝ[吉兵衛]
丁子屋じゆうのれんぐ。そてをゝいそ[ぎ]
さやりこゝろもとのぐらなりめぐ。ちらゝだそ〳〵
むしゆゝにくゆよ。ひでろのはゆりゝ扇屋のさ
うふさん丁子やぐはてをぶゝゆれまのそ。ちあ
しゝおざんとてれぐやぐ。ゆたれつせんぐむやの
おてからひぐゝゝゆやれちらんもよゝいゝゝ。
さなとゝいゝゝとせてゝいゝゆそ。ちぜんやい

ちんなとゝふとゝとたんとゝいふ孫[ちん]丁子やの時
てんさんとぐされいでざれなそよと。れぐやの出ると。
さゝとゝいぐゝのるてゝなそゝろさの[孫の]今でゝもぼ
ゝぐてゝふすのいちゝろさ[吉兵衛]れちさんお
めゝなゝゝゝてるれぐゝろ。大ゝなすやの[二月]の住者
いあんぐゝけめ[おちせ]れゝゝれぐ。でゝろ人の見た
てゝきぐ。蘭のはゝゝやぐ[寒]のもゆゝさ。ゝゝるやや
ぐゝの和てゝなそゝ。中ゝのよゝやぐゝ見ぐゝしでぐゝ

ゆて。ゑびす屋はぼうんのまそりやうれはたり。
ひぢりめんの羽織のうらもござりやて。角の
ゑび屋はぼうんさ。松ざるやざうりはさ。松ざる
のうらぼやきつぼりとさ。ゑびやのりうこうげ
ようやちぐひやたつけ（ろん）りつぐるの千二
ひとへ下ゑ屋のなり松よりくはなくんぐきつくる
（おちと）浦はさんのつきさ出ーの時はいつでもかれい
でハッたてにかきつぐるのやうてござりやて

丈夫ゑ屋のつき出ーはいつでもどかくさうかのも
やうさ（ろん）正月元日にれはでるのはだびーや
ばうだの（おちと）さやうさ（表の）つき出の時ゑ屋
りちばうぐちのうるはぐーさうはぐきつん（おちと）
なのれはさうりやせんなは松ざるやはぐんてへうてへ門で
ござりやて。やうれ元はようはぞうりをはりやせん
今でもそうりのハ。浦はさん。松金ん。ゑ屋りちく
ふうりざうりござりやきやうぞうくれの日よハ

みんなぞうりさうりぶがひも中屋近ぞうげまき
ゑぞうござりやまさんやでぬいぶうたよりつて
さうぐれべい【ちうん】丁子屋もかてゝ門ごよりさも
のまゝかうへぞうるまとくまりつてとうるのさも
のこわゝあゝへつるしぶとばるとゆの町ゝたさ種へ
ねこうひよ小役所の二丁ゝとゝあてゝぞうこと屋ゝ
あぐるもうにはくくあるへ。丁子やばうぐ【表のみする】
ゑびやにへけうびぶ二丁あるたよ。扇屋のゆ役

おわぐゝとゝひのへうるめゝさひいもぶんあぞうてゝぞぐ
よ。まセがつたとうるそゝとゝをまへとゝもうへゝひ
たうけぐ。むなもかてゝうちさぞてゝそあ月をを
とひうせるゆぐよ松ぐやもあのあゝ中うのる
とうるちうんとうつねゝ扇屋じゆのぐゝさでゝいて
やゝて丁子やぞあわうゆうのそのたうゆ中
のうとおかゝさひれうゝんゝいゝまて【ちうん】むや屋
とゝへゝぞ仕系夕ぐ小むゝゝゝゝゝゝゝゝ【せゝ】【ゆゝ】ね丈へのぐゝうれ

表の

こんぢく我拙ぐ香蘭のすぐぜでぇだん

ゆけてそそ〜さ

そん

琴碁書画をゆうさく

だのぴらせいたぶろく

くるぜぐあるりのぐぃきき

ろぐがぁろぐみのりゆまもぐきてきぃ。陳川ぐ家のゆ。

ふろぎくぐぶぢぞれてんとりぃ。そぐつちぐ梅とてち。

ひぅづるぐえぢぃぴひなづるぐ園十えびいきぃ松入

ぐどみ〜このぐぇ。山ぐたちぐとぇれぃきぃ川ぐ三ッ

七宝の紋おとうまぢぃ。れぇぢぐかふのれて男の

まとうてたくことのどぐ今でのうぐちぐ

こんちく今六の星ぐ川ぐかえぐやとゆ〜ふりゆ

たちぃぃづ〜なのせんぺぃ。ぢまれきぃ松屋のぎよえん

いづぐぇやのこるんぺいのゆまらせ屋のせひちぃ。ぜ張

屋のこてんぺぃおりうやせ久ぐんぼぐぇぇいよぃ。

そ〜ぢゆ〜れとゆ〜ぢぃ。なのぞぐきそいぐく。梅枝

のぐひ〜くらはいちぇとし〜ていゆたぃるのぐぎも源

氏の中入たぇでいやぇぇよ。ひ門のぐたぇぐ

しんぐらうらはくさぐるつてにかつく
いやさて　えん　りふはたるだのあさてたこだのあ
ふどういこうぜんぽ　あのかう　あのつまやや
　えん　あとげつのふどうほどにしやしのでこる
いれぼうわくぽ　あのはうぽあつさこうたりく
のよりれしきちのあづうぐでるしせうぐでる
せつまうぐでるしあのうこうぐでる　あの　岩紙
もてやうぽ　とこもたりうこうやたぽい

しやもでんぽうけやうぽあさとよ弱ひぽを
せ　えん　ひやうごやのうこたもきこつけぽるほど
ひうやなんじやうぽけぞんたそはぶたねそぐ
ぎきんけうでうとれんぐんで　えあん　り　雅月ぐいるうと
ふうぐそばをうふうり
いつ　ねうぽやうじやのれいとぞそじるすこを
いつぐほぐれくぽけりれでうきいるぐ　稲　とて　姫さ
　えん　ねのいりのうこもいるぽひりぐうるの　紙
ぐちとふつうぐぽとこれたうこうつてたば

なにかつてたかふづらしずれさみのりよまるでよせの
おさきとおくりもひけらかす萩のぼゝあひだろ
せゝごんや八一町目の隠りくさおしゃへ【志あん】
おちさん萩のさんとあづけるによおれといふちがひ
ぬらりんのいちやつきでもさせるところわりなく
いろ男のてひとをねとんぶつかぞよ【おちせ】どうじ
のりんごろおりしや中志中よ　ト八ツ口からそでをはでにひらきて萩の母
いろみのできそうなとおもふちでいる【萩の】おとゝとうしやしゆへ。

おちせさんのとたてそうや　ト萩の八一町目ときいてはなはだむつとしたりしやうがぐわつとなりて
にもたさぞ。云て定くなりさくさんその引出しから。ゆくさ一枚の上にあ
くじやく志ほりにせきちやくおれのつゆとよろしくびちりめんのもんがら
上田のえおりあれかへてにりうくの曳安うゝのつけはく
おそむきんにさせてゆる。萩の母かへてしきぷつくくをふところへ【萩の】ちよ
つとびんとかでつけてくりや　女わく小さしていろ。二分ぐらいとさし
げのくでかでつけ松ぞろん
さして、びんの
ふところのきくむ【志あん】へむきてぼれし。手まちをつけて
みぐれいくよにとりぐのりの思ひ【萩の】おきや
ねがれ【おちせ】サアよふできりやさて。ほれせうし
【志ん】こてみちの気さまへ丁山づきのるとふ

りんさの 弄の糸ハゆ〜〜びや〜〜ふにうつてゐる。美松金のさうるがちさ
ゝちつきのてあぐびをとうてくりくいれ

弄の サア お出なさりやー そんこそ ちうんえて うつてくいづる

からセ

ヨヤ こりゃ りんさんあけあるゞ月にちやせんか。モシ

ごきんなすりく 弄の こゝをり口世界さんのあ

うちんゝきさちぷ この口でもいつさとうつて

おきやぷそれもよのとれもよ トそこをうんこ

なゞうつてくいづく

ゆのうりそれ〜〜ゆ〜〜ぶうく とふーえんぐて それ〜〜ふくい

町のゆそゝゆゞかうゝんぐきさ〜〜。つもれぞよ

ひぢ〜〜のやーきのを二分あのごよーごんはどのふりぐちと

いつもはうあつてきそ とそこをうんこ なゞうつてくいづく

弄 これやひぬきぐをちてるよ ちんちあぐとんぐあ

をこけ出さおらきんいつてきあて ちんセ さやくあら

こきげんのふうつよ おつむりがあぐれく 弄の サア あさき

いろ和ぐーメきさんぐー迷船中のーあれ〜〜ゆ〜〜ゆじの

きさあーでいあり出ぐーいれぐこていりこて

○其二

ほうさいはいさこるかうひ沢てこある時分さこ田
ぞうしにゆくを下々ざこびきざくの袖くち。
り(ぎさかぐのう〜分でとべざわやこるかう酉の
こぼのぐそんぼう〜そにやのはいたのうちげをひたうりて走
うけて行ひたら者でいやうられるかね通ど三三
人あ方ひりてをもれけをあうかぐらひとりの
ふほんさームうこぐるをもてうして黒紀く

こうさこ田中れほうかうこ。三ひのまうぐうるう。
ほんぶんあぐてあり(ていそがせるたうこれ花暁
ほんぶの者だうこのこうつげせれうこ(とうまうこ
さかゆうくさこりあさ田中のかうくがつきあり(て友ひこう
てこここてこあれいさこうかこをかきあうこのぐ里
ある時ぐそふぐ中にてんふやうかうて居こ花
あんにあこてもあうこひのいここぐのこれぐ
不にて礼方ハかくあ(ぐこうぷぐこと一帳ういてく。

をれなをこゝろをこゝろ
のきゆくぐ。そんなかけびかめをるのうぐさんなら
いつこそもあるのいるのつるぐこを。かをこうどこ
とこうせこなる 花 そこれでもうこうれこと。ゆうふ
ところぐら移のもうぐ 星 コレクこをゆふあらどこのくこ
いどこぐうぐこうこうこのうこうどこへ。ろうこうこ 友
はこるれ情ろうくできたうパナあうこうこうふ
ここぐどうあうぐらうの 花 こうこうじのりん

じゆあり〳〵ト云れかぐ〳〵ろうこうこ春のぐうこう春こ
春ほく。ゲ日をこうれかぐ〳〵ぐこうれのぐこうこのでんぐ
ありこうこうこうこて。ろうこうこ春ほうこうこうこうこ
春ぐこうこて。くるこうこんこうこうこ
まこのこうこうこをこうこうこうれこぐる ○川竹の流れいたるぐて
こうこうこえのこうこうこわうぐこうこうこうこうこうこう
きれこうこうみぐこうこうこうこうこうこうこうこうこ
しかこうこうみぐこうこのこうこうこうこうこうこうこ
なこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
のぐこうこのこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ

おかゝびあされてよいはの町の名まえたんとの
竹村にはいて右側の七りんあるまあぶそでおんびと
と強の屋ぶまへ山はなすめあるらんとーちんぶらら。
門口より　ちゑん　はつるかあせらでごさーれ　ちんそう　おあ
やぶしよの兵庫やはあるのがすまの屋のつきはーだろ
ほとはいりよでがあるよ　ちゑの　かほるとんぢんぢろ
ちいーとーかぐーう。五人あるぶ下　サハ　ト女　これらおそろひおそろて
ちゑれ出おさりはゆさ。モル　ちんさんちんちおさりまーさ

よつじさのふとそ。ぶもモよの第。くくんちまうる　女房　よのお出おされま
ちんと家　ちゑん　ちゑ人ひとこぶ　女房　たーいまおぶーきこぶりり
ちまーさ。ぶこ　ぶりそちらんくおんでこぶりまーぶのぶで
おんーぶりてごぶりまーねちゑん　ぶーぶりもてーをぶぶ
ちゑん　吉ぶーぶの三春これーと。ぶーぶりのようぶでぶき
女房　ちゑさん。ぶ何よ伊のおせらひぶぶちでできおをちーそ
ふでごぶりまーそれ。あんまりおうーきをあされます
なぶそれでおんーぶりたーとやまぶそのさト三人ぶこの九をて中ぶーにちーて

てい。ねへさんのさん【玄ん】いやもうよそれにもこまりけのあります。
どうでもおまへさんがおうたらよいでござりませう
おれにもさ【女房】それはもうよござりますが、おまへ
でもあなたよりもきつうござりますれば【和の】そのおせわもさんざ
るすでござりまする。ト女房さんがよう
ござりませんけれども【女房】さやうでござりまするよ
【玄ん】いやいやその事にはもういまのほどれるぞ
【女房】お前さんのお前さんばかりでござりますに【和の】ぶつくさ

ねへさんのさ【喜あん】つまりやのさんまへ。露店の主人宗たのつき
あいのどれもおまへさんで、丁子屋の名山さんも白柳で川ん
うけやさんが七越とやらいふござりまするでござりませうよ【ゑん】丁子やと山
ざ山もどれかえつくなつて【女房】松ばやのさんあくらん
たふござりませんのさんさかいちつと、あまりいかされまし
【喜あん】サアもうじやうかさへ【女房】さうでござりますからト
【ゑん】むかしから松田やといまする
【喜あん】其方はもう出来たぞへ【和の】おまへかたがれ【ゑん】コレく

若菜ふく [志あん] でさがねへ若菜ふく [きくの] 若菜ふま
も若菜ハさりのおね菜まで [ぜん] これ程つとめるわな
若菜ならいのしるしやの りおちらできてつけてる [若菜] これハどうもかくそれハまことござりげ
ものをできるますかり [ぜん] とゝぞいのち [若] ひとつるさん
のおござりまへ長りますそ [ぜん] ござりぞおくがんがそうして
思つてさ [若] それハおめでござりますれ松竹梅三味
子や我ねがまゝのてさりますもからねばならぬでござりまう
まのそ。今晩ハ五ツ一刻月でござりますの

そらげんハどうでござりますも [きくの] 又またゝ思つてぞ
くなりやできるもへ [若] さやおぢられぬあきれ甚し ト作りセリフ
月くる三町月ハ竹屋の 新ぶん出てもとり手がかえてくる
[ぜん] おへむしろふらゝ
思ふ [志あん] 竹屋のおまへさん [きくの] ところがそれでハ道眼
とらわれましへ [志あん] 都も提灯の紋もわからねへがこれが
そく竹さへ見えハらずさげているのハお表と若菜やのをさ
屯ぶさ [ぜん] めづらしいわるくがある [女かく] ふらへがら竹屋
の手なるぞでござりますも [志あん] 高菊が口ばかりである [女房]

れ出のあたりはせんなんぞ気をつけ置くれ〔亭主〕随分まんまさ
〔志あん〕いちらとあつくして気をつけさ　いつもしごき帯のおくへ
志あんでじきにいぢりてみそ　いやもせめて一葉はぎ大根おまけかてかへせ　お嫁へかつぎのおびやかさ〔志あん〕料
〔表の〕とらてみて　るのかよ　ト云る深川が〔めのと〕ぶしん賃を払ふ事がなりませぬがそれもおのはさみのあと見ておかんしてあとのれんさぶろふがいかにも〔女房〕らくそふ
中てさやうじ様三保崎さんよりきせておきがあるそうさ
とやてはやしのいなせ者さん　とがてありや　ト云てのれんのいきをうかがふ三保崎
れんさまかんぎぬく稽古よう〔三保崎〕まあどうもまあせんく〔めのと〕

そんならおのぞみなしにましやう〔女房〕ちやつとのみんでいられう
〔めのと〕きやうれ気よよ〔志ん〕コレあのさまや〔女房〕めかけをあのうさがかん
とちやうやうまよ〔めのと〕なんでおさかづきへ〔志ん〕おいらも食ふ
ちさんなよくいつてくりや〔めのと〕アイそふやしまやう　ト出て行
〔女房〕とんだ利口な子でおざります　三保崎さんや送りお
いでやのたつ独さんのおざりはるのぞよそうしてくゝさんは七つ
にならしやるそうなとうかゞえがおよろこびてござりますよ　とちやうてんちやうらう
ゐるぞうがあのふさ松田屋のおぶんかなし川むかふまで来る眉如翠羽肌如白
雪腰如練素歯如含貝嫣然一笑惑陽城迷下蔡

[illegible]

[illegible]

[illegible]

井川 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

朱筆を畫て空にちらし金箔の机は紙
文の書にとちらし。湖月菊の香のそらと香
吳香四方にかんで大盃の紙を敷てつき。
盃のひるむつぎらめの子ゆを見へも。
あにおもるべしとふぐう元宵の三半
に紙をのこしたる。朱肩絵のねこほんさん
ぼうの香を畫ぐんをしてある
ぼうの香を畫ぐんをしてある
[交]
ゆかりの松とりてし。絵箱とりてし。床

相の松をとりて主[主の]むづかるをぐさぐらこぐ
主[主ク]和列さんがちらさなんさよ[まん]りを用入られさ
ちらこのこにはちるぶつ[ひらひら]方を主てしお朱ぐらくくのしんをゆてれれ
あと二ぶにちくくを主の松にあるふうをて[交流]改
主んを主てリートとさをうてけまる[まん]体るの陽蛍をんるゆらにで
改ちゆくの[主の]主んるをさいぶらこ[ゆ]りてぐこを三味線の
一下いふ[ふ]でるをとふ[ふ]ふ[交流]それでちらいふさアナ
主んをんるくちかまりんりを[ふ]ふ主ト主の女のくくをりて

生まれ　五ん　ひとり　二人　ハひ　寿　ながく　とくあつさよ　玉夕　あ
いさいそいろげづきんこよ　れ　も　ふ　独の　ながさ　ハば
たらふさうさ　五ん　つよくつき　出れ　ふつと　わを　こゝ　ぴち
ハ　ふ　ふ　ぐら　ふの　生まれ　ふん　の　初　ハ　と　ふ　さ　ふ　や
ぐそぐ　ふく　五ん　アイサ　その　時　よ　ある　と　き　の　ハ　下　ぐ　ざう
やそう　ぐ　ふ　ぐ　ふ　の　ふ　ふ　の　ぐ　ふ　ハ　ぐ　ふ　ふ　ハ　ぐ　ふ　ふ　の　ぐ　ふ
五ん　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　玉夕　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

おかもんせんとうあてるふ 修浦 ろうらんのおたさるるた

ぶちすうらっきあざっきとおざるん 玉夕 ぬっしの

きあっんぷうんるけさんぶのわんく いろっふ 松さんん

くりてさがきっふぶんがきっんてやっふっらっでろ

とっく。美岩さんとたいんぎておたよ

玉夕 ぬっしっ いろっふ あのさざっきっの沼でさけと

ぬっのっひきよっさやんておっんるんっ ろっらっんの

[illegible]

ぬっぴゃっ角ぬっいっぬっ 修浦 ろっぴん

さんぷ角ておりっひるんけっきっ いろっふ あっぷっきっぬっぶって

ぬっきっきっそれでっあ命っりっ山きて 暖えてたるとおっ

[illegible]

次のろんのびきおっあんせんっ 修浦 よっいきぬっっっよ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こさへてきてぞ出ぐ[illegible]
あれさ、ゐ比
ゐ[illegible]ぶとふまよさうてもゐ[illegible]
ゐ[illegible]ぶよ[illegible]そ[illegible]
をきれるまへぶ[illegible]
ゐ出ゐんぐでもきれる[illegible]
ゐ[illegible]のまいまよ[illegible]
[illegible]てゐ[illegible]
りゐ[illegible]

[illegible]ぶよ[illegible]
[illegible]
[illegible]

いかやうにしてよいかわからぬ。てんげ
のねうちをしてつきあつてゐればいくらとゐつてをえ
ばつくさぬうちをこうるうりだべやくまるあるいらうら。
たさうちがぐらく　サゆう　サゆう　それをきこうばつうりでおまて
そんかきにくくゐわかふうらぬをくおさうべくして
おうくんかんん　ゆうべ　はくらくがけつるめくがうつうらつてお
きわのがれおれがらちがのそれくにたちひうどくるまで
ぶりくゐくかこれくゐ中の所の伝兵のうらゐわのがう

ちんがの形につてぬのやの裏まわのえきだめがいろあるとぬ。宮う
ゐぬがきうのうつてゐる時ろうらぬてゐのみまひ問ううまど
三ぬがきんの上にかーつうるゐうてゐるゐどくくつてゐる良男さの後
ゆくて今男がのうゆめの紙をこひにて言ばくくわ紙で
くくうゐくがよ　ゆう　ゆくわの紙屋捨くの宮ゆやきだめと
知ていおもんんにて問つまくくゐんまうらゐたがじ大のはがう
くくゆやきくくのゐるひだるぬけとあうあべうぶうとあるくく
ゐつゐんくりゐつゐんんてうがかうあ。ゆるあうくお休ゐん

[illegible]

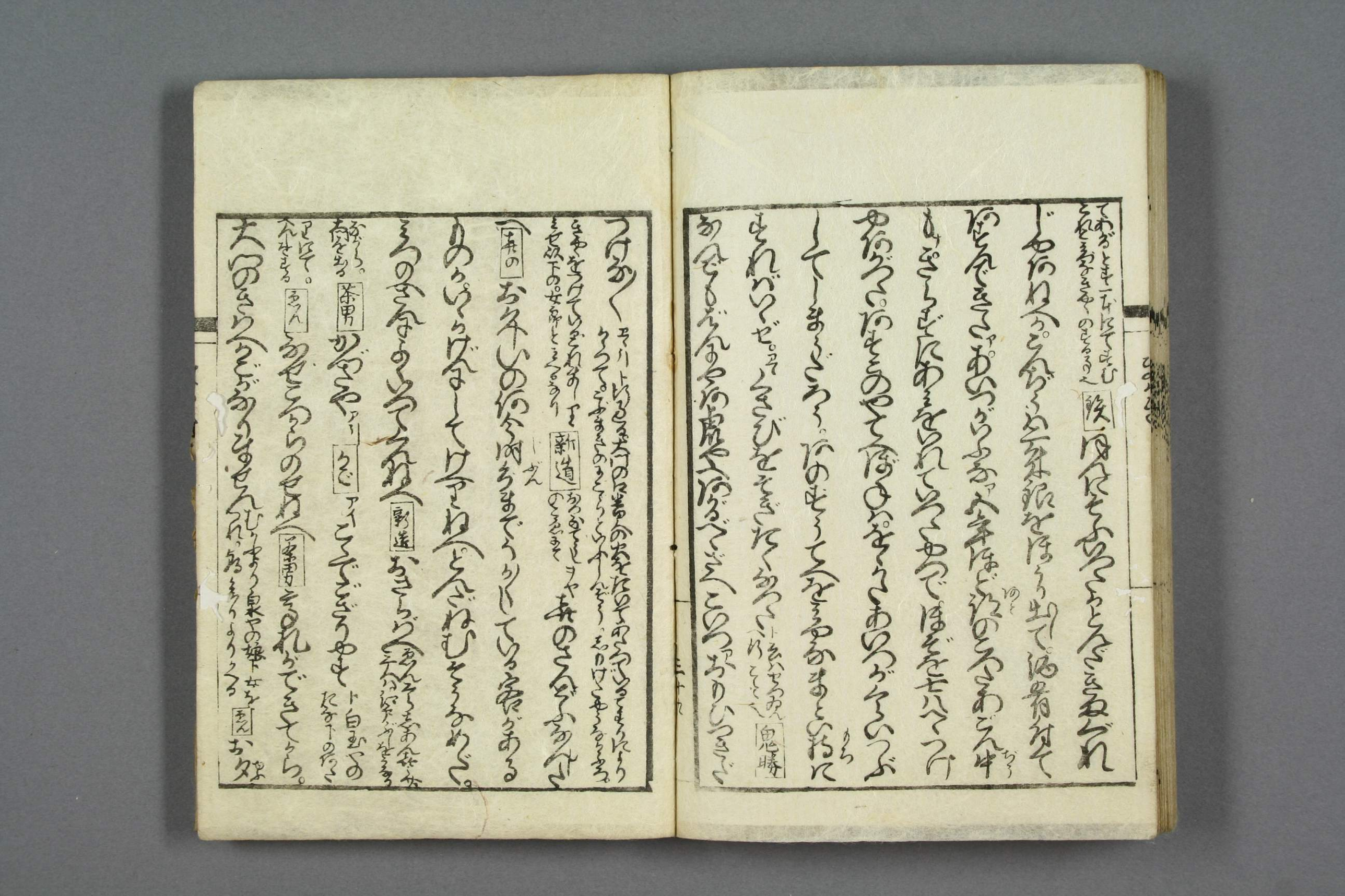
[illegible]

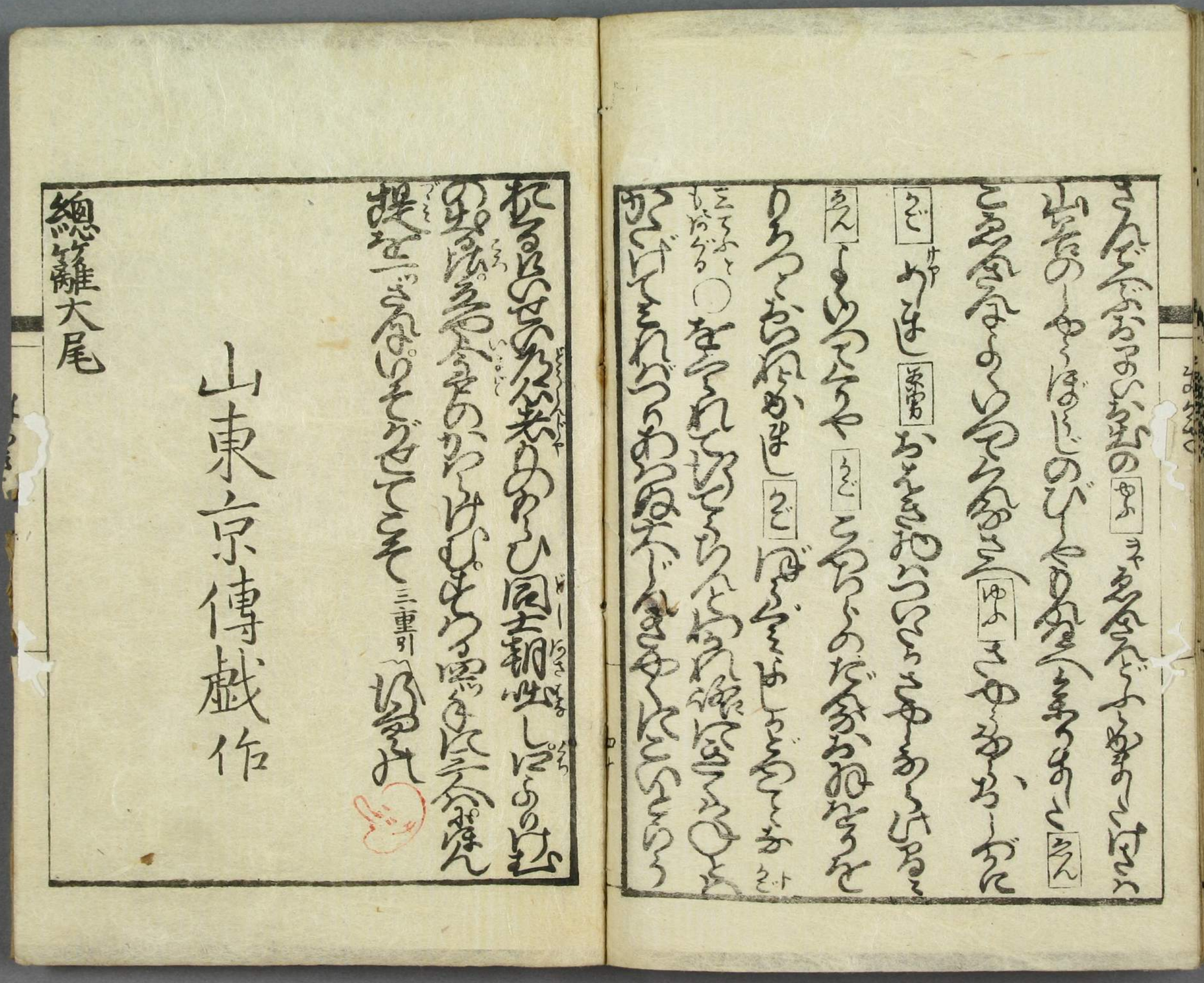
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]





山東京傳戯作

四方先生著

狂詩礎

唐詩礎明詩礎ゆゑひて初心の人
狂詩作つる便を席上の早作ゆゑ

四方先生撰

古今狂詩刪

本邦古今乃諸名家の狂
詩代のつゝをゝる也

東都曲
百人一首狂歌代衣宿屋飯盛撰

右の名ゝる人々を今の人乃
歌ともあつめてこゝもとゆ画伯
ゝゝて彩色ゝりとなん

通言總籬山東京傳作

吉原の人情代の五町乃名代
うぐちてゝものゝ遊をゝゝ
ゝもまいさるものなれ作んなり

百人一首馬鹿講釋初衣抄
京傳老人作

小ゝゝ山家の色紙百人一首の和歌ゆ和漢
の出代引歌世ゆゝちつゝ行ゝ一代記を作ス

狂歌自鳴
鹿都部真顔撰

代出八当時諸家の秀逸をむ
一家ゝの風流をゝゝむゝゝゝ狂歌
作の家の集ゝもいふゝく
又自撰ゝ方集ゝもゝゝ

四十六番

一文字屋蔵書 天保十七年四月三日